

令和5年度

奈良県公立高等学校入学者一般選抜学力検査問題

国語

注 意

- 1 指示があるまで開いてはいけません。
- 2 解答用紙には、受検番号を忘れないように書きなさい。
- 3 解答用紙の※印のところには、何も書いてはいけません。
- 4 答えは必ず解答用紙に書きなさい。

□ 次の文章を読み、各問いに答えよ。

たしか、三月の頭とか、朝晩がまだ冷える季節に、ナスの種をポケットに入れていたことがあった。夏の野菜の苗を種から育ててみようと思つて調べていると、種に発芽のスイッチを入れるにはちょうど人肌くらいの温度を保つとよいと書いてあったので、名刺くらいの大きさの、**A** ができるビニールに、湿らせたキッチンペーパーを入れて、それに種を包み、肌身離さずを持ち歩く方法を試していたのだった。親鳥のような心境で、種から白い根を出すのを待ちわびていた。

その日は、デザイナーのAさんが店を訪ねてきた。自作の絵本をつくつたから感想を聞かせてほしいと言うので、ポケットからメモ帳を取り出そうとして、何気なく例の種が入ったビニールを机に並べた。

「なんでですかそれ？ お薬？」

「ああ、これはナスの種で……。」

それまでにAさんと農業の話をしたことがなかったから、**B** キユウに種の話になって驚かれた。それから本の話聞いて、別れぎわに、いつか農業に携わつてみたいと打ち明けた。後日、Aさんから連絡があった。「友人夫婦が京都で有機農業をしているんですけど、ちょうど今、求人をしていらっしゃるんですけど、鎌田さんどうですか？」

ポケットの種が生んだ不思議な縁。何千、何万と並ぶ本の海から、今まさに読まねばならない本をびたつと見つけ出すような、偶然の嗅覚というかと、そういう、技術や知識と無関係のところまで、人生の分岐をいつも救われてきた。農家になつたのもそんな偶然からだった。

あれから、色白だった肌が日に焼けたり、体重が落ちたり、ふと鏡を見て、少しずつ変わっていく自分に気がつくことがある。そうやって、仕事に見合つた風貌になっていくのだろうし、体つき以外にも変化を感じることがあつて、とくに距離や広さの感覚は農家らしくなつてきたと思う。去年の日記を見ると、初日の感想に「畝が長くてビビつた。」と一

言だけ書いてあつた。その日の仕事はズッキーニの収穫で、その畝はだいたい70メートルあるのだけど、最初はこれがとんでもなく長く見えた。慣れないうちは、ぬかるんだ畝の間を歩くことだつて大変だ。今年の夏は、同じ場所にオクラが植わっている。いつから畑をすいすい歩けるようになったのか、よく覚えていない。

農作業は、自らの体を物差しに世界を見る **C** クンレン のようだ。

親指から小指の先までちょうど20センチ。握り拳が10センチ。小股の一步が50センチ。大股だと1メートル。畑でいちいちメジャーを使つていられないから、手足を使って距離を測る。慣れていくと、見ただけでなんとなくの長さがわかる。作物の株間や、畝の長さ、広さ、肥料の計量など、自分の体を規格に世界を観察すると、風景が具体化していつ、最初はあんなに広く、途方もなく感じていた畑が、今は違つて見える。初めて歩いた時はやけに長く感じた道が、次に通る時にはなぜか短く思えたりする。道や畑が縮んだわけではないから、変わったとすれば自分のほうなのだ。二年目の季節はそんなふう過ぎていく。

農業の一年目を終えて、そんなことを考えていると友達に話したら、「そういえば幸田文もそんなことを書いてたよ。」と教えてくれた。彼女の文章を読んでいると、つくづく見る目がある人だなと思うのだけれど、樹木の観察についてこんなことを書いてる。

去年の晩秋にも、ここへ櫓を見にきているのだが、その時から夏にもぜひもう一度と思つてた。そういう思いかたは私に、抜きがたい家庭人の癖がついているからだともう。若い頃にしみこんだ、料理も衣服も住居も、最低一年をめぐつて経験しないことには、話にならないのだ、と痛感したその思いが、今も時にふれて顔をだすのである。

(「ひのき」木「収録、新潮社)

菊 のあくは椿の葉でも抜けるんでせ。最近仲良くなった近所の爺さんは、そんな調子で生活の知恵を教えてください。山椒の保存の仕方とか、山菜のこととか、昔の茶摘みの話とか、そんな生きた知恵を仕入れると、来年、同じ季節がやってくるのが待ち遠しくなる。山椒の実が取れたら今度はジンに **D** 漬けて 込んでみようとか、そんなことを随分先のカレンダーに書き込んで忘れないようにしておく。そうやって、いろいろなおいしいものを知りながら、自分にとって農業と生活が縫い目なくつながっていかばよい。

幸田文が癖と呼んでいるものは、家事仕事から培われたもので、冷蔵や流通の事情も違ふ、ひと昔前の家事は今よりもずっと季節に寄り添うものだったんだろうと思う。一年経って、彼女の「一年めぐらないと確かではない。」という言葉の意味がよくわかる。例えば、ネムノキの花が咲く頃にオクラの花も咲くとか、雨が続くとカボチャがみんな腐るとか、それが今回だけの現象なのか、それとも毎年繰り返されるものなのか、季節がひとめぐりしてみないとわからない。春夏秋冬のそれぞれに景色があつて、畑では毎日違うことが起きてる。季節の移り変わりとともに生きて、だんだんと野生の暦を学んでいく。

(鎌田裕樹「ポケットの種から」による)

(注) 有機農業 化学肥料や農薬の使用をひかえた農業

幸田文 小説家 山椒 芳香のある低木、果実は香辛料等にされる

ジン 酒の一種

(一) **A**、**D**の漢字の読みを平仮名で書き、**B**、**C**の片仮名を漢字で書け。

(二) 線①とは、筆者のどのような心の状態を表しているか。最も適切なものを次のア、エから一つ選び、その記号を書け。

ア おそれ イ いつくしみ ウ あせり エ やすらぎ

(三) 線②は、どのようなことをたとえているか。最も適切なものを次のア、エから一つ選び、その記号を書け。

ア 農家を紹介されたことで、不意に農業への興味が生まれたこと。
イ 自分が理想とする農業の在り方を、図らずも見つけ出したこと。
ウ 思いがけず、知人が自分と同じく農業を志す人だとわかったこと。
エ たまたま、農家とつながりのある人に農業への思いを話したこと。

(四) 線③について、筆者の何が「変わった」のか。文章中から八字で抜き出して書け。

線④とあるが、農業と生活が縫い目なくつながるとはどういうことか。最も適切なものを次のア、エから一つ選び、その記号を書け。
ア 自分の力で、丁寧に栽培した作物を食べることで、家族のきずなが強くなるということ。
イ 農家の人から聞く生きた知恵は、暮らしの中の自分の気づきと共通するということ。
ウ 作物を育て収穫することが暮らしに溶け込み、日々の営みの一部となるということ。
エ 自ら畑を耕し育てた作物が、多くの人の手や店を介して食卓に上るとのこと。

(六) 幸田文の文章を引用した筆者のねらいについての説明として最も適切なものを、次のア、エから一つ選び、その記号を書け。

ア 筆者と共通する考えを示し、伝えたいことの説得力を増すねらい。
イ 筆者の考えに沿った事例を示し、自説を学術的に裏づけるねらい。
ウ 筆者の考えに賛同する論を示し、筆者の着眼点を印象づけるねらい。
エ 筆者とは異なる価値観を示し、多様なものの見方を提案するねらい。
(七) 線⑤とは、日々の経験を通して何を理解していくことか。簡潔に書け。

〔一〕 次の「文章A」は、「知っておきたい地球科学」という本の一部であり、「文章B」は、この本の「おわりに」の一部である。これらを読み、各問いに答えよ。

〔文章A〕
地球科学は四六億年にわたる地球の歴史を扱うが、それは環境が激変してきた歴史でもある。太陽系の誕生に伴う小惑星の衝突から始まり、幾度となく劇的な変化に見舞われつつも、そのたびに不安定な状態から回復し、何十億年もかかって現在の安定した状態へ移行したのである。地球史四六億年と生命史三八億年というスケールは、日常生活の時間をはるかに超えて長い。こうした視座を「長尺の目」と呼んできたが、この「目」は未来の予測にも威力を発揮する。何万年、何千万年というスケールで捉えることにより、長期的な予測が可能となる。「過去は未来を解く鍵」というキーフレーズのよりどころは、こうした長尺の目にある。

たとえば、地球温暖化問題の理解もここにポイントがある。温暖化するのかもしれないが、専門家の間でも意見が分かれている。これは現象を捉える視座が違うからで、ある意味で両方とも正しい。

数十年単位のミクロな時間軸で見れば、温室効果ガスによる温暖化は確かに起きている。一方、数万年単位のマクロの視座では、暖かい間氷期が終了してこれから氷河期へ向かう途中にある。こうした視座を意識して地球上のすべての現象を勉強するのも興味深いのではないだろうか。もう一つ、地球科学には重要な制約がある。

地球は宇宙にたった一つしかなく、経てきたプロセスに「もしも」がない。すなわち、時間を戻すことも、また物理学や化学や数学のように再現することもできない。これは一般的に「歴史の非可逆性」とも呼ばれている。

そもそも非可逆な現象を多数扱うものだから、理論のとおりに行進す

つまり、日本では変化すること自体が「常態」になっている。おそらく日本列島で一〇万年以上もまれつつ適応した結果、私たちはある種の「しなやかさ」を身につけてきたともいえるだろう。このしなやかさを維持するために、地球科学の知識が役に立つ。

地球の壮大な姿を知ると、自然に対する畏敬の念が生まれてくる。私は日本人全員が地球科学の最先端の知識を持ち、人間の力をはるかに超える自然現象と上手に付き合っていたらいいと願っている。

(注) 鎌田浩毅「知っておきたい地球科学」による)

〔スケール〕規模

キーフレーズ問題を考えるための重要な手がかりとなる言葉

プロセス過程

大陸移動説現在地球上にある大陸は、時代とともに移動して分裂・接合し、現在の位置に至ったという説

ウエゲナードイツの気象・地球物理学者

プレート・テクトニクス大陸や大洋底の相互の位置の変動を、プレートの水平運動によって理解する考え方

強靱しなやかで強いさま

〔一〕 線①の「わたる」と同じ意味で使われているものを、次のア～エから一つ選び、その記号を書け。

ア 木々の間をわたる風 イ 連日わたる会議
ウ 巧みに世をわたる人 エ 大海をわたる船

〔二〕 線②とあるが、「視座が違う」とは、地球史上起こる現象について考える際、何にどのような違いがあるということか。それを説明した次の文の() () に当てはまる言葉を、「[]」の部分から三字で抜き出して書け。

() () の捉え方に長短の違いがあるということ。

〔三〕 線③とはどういうことか。その説明として最も適切なものを、次のア～エから一つ選び、その記号を書け。

ることが少ない。言い換えれば地球科学は「例外にあふれている」という特徴を持つ。地球の歴史には思わぬ事件が多数登場するが、われわれ地球科学者は起きた現象をできるだけ正確に記述しようとする。一九世紀以来の地質学の蓄積によって、記述と体系化はかなりできるようになった。しかし、それがなぜ起きたのかという根源的な質問に答えられる場合は実に少ない。

いつも非常に歯がゆい思いをするのだが、他の分野から寄せられる「因果関係」の質問にほとんど回答できないのが現状だ。一方で、おもしろい事実は次から次へと見つかるので、その発見と記述作業に没頭しているのも大多数の地球科学者である。

いつしか大陸移動説を提唱したウエゲナーのように、あるいは自分がプレート・テクトニクスの発見者となる日を夢見て、眼前に展開する新知見に取り組んでいる。

ここには「例外や想定外に出会ってもうるたえない」という興味深い性格が現出するように思う。言わば、想定外の現場で発揮できる「知的な強靱さ」である。

具体的には、近年の日本列島は「大地変動の時代」に入り、地震、火山噴火、異常気象など地球にまつわる想定外の現象が頻発している。ここでは例外や想定外に出会ってもうるたえない、事実を冷静にマクロに分析し「長尺の目」で次の予測を立てる必要がある。

思わぬ事件が突然起きることが当たり前の世界史や日本史と同じく、非可逆の現象にあふれた地球の歴史も「壮大な想定外」として知っていただきたい。地球科学を学ぶ上で大事な視座の一つとなるだろう。

〔文章B〕

日本では、地面が揺れ、火山が噴火し、台風がやってくるのは当たり前の「現象」である。そして巨視的にみると、日本人にはこうした「天災」に対処する能力があるのだと思う。

ア 地球が変化してきた過程は検証すべきではないということ。

イ 地球を研究してきた過程は他には想定できないということ。

ウ 地球が変化してきた過程に仮定を挟み込む余地はないということ。

エ 地球を研究してきた過程に絶対的な正解は存在しないということ。

〔四〕 の段落は「文章A」においてどのような働きをしているか。その説明として最も適切なものを、次のア～エから一つ選び、その記号を書け。

ア 前の段落の根拠を示し、内容の正しさを強調している。

イ 前の段落に疑問を投げかけ、新たな考えを示している。

ウ 前の段落の具体例を示し、内容理解の手助けとしている。

エ 前の段落を深め、これから展開する内容につなげている。

〔五〕 「文章A」で筆者が述べている内容と合っているものを、次のア～エから一つ選び、その記号を書け。

ア 「過去は未来を解く鍵」という言葉は、ミクロの視座による考え方を根拠としている。

イ 地球上のすべての現象について勉強すること、様々な視座を身につけることができる。

ウ 地球科学には、非可逆性の他に、他の分野からの質問には回答できないという制約もある。

エ 地球科学を学ぶには、地球の歴史には思わぬ事件が頻発することを知っておくことが重要である。

〔六〕 筆者は「文章B」で、日本人と自然との関わりについて述べている。

(1) 線④とあるが、日本人が「しなやかさ」を身につけてきたのは、日本列島にどのような特徴があるからか。簡潔に書け。

(2) 「しなやかさ」を身につけてきた日本人が自然現象と上手に付き合うとは、どうすることだと筆者は考えているか。「文章A」中の言葉を用いて四十字以内で書け。

三 次の文章を読み、各問いに答えよ。

十二月一日ごろなりしやらむ、夜に入りて、雨とも雪ともなくうち散りて、むら雲騒がしく、ひとへに曇りはてぬものから、むらむら星うち消えしたり。引き被^ひき臥^ふしたる衣を、更けぬるほど、丑二つばかりにやと思ふほどに、引き退^ひけて、空を見上げたれば、ことに晴れて、浅葱色なるに、光ごとごとしき星の大きななるが、むらもなく出でたる、なめならずおもしろくて、花の紙に、箔をうち散らしたるによう似たり。今宵初めて見そめたる心地す。

〔建礼門院右京大夫集〕による。

(注)むら雲＝集まりむらがっている雲 ものから＝けれども

むらむら＝まだらに 引き被き＝頭からかぶつて

丑二つばかり＝午前二時ごろ 浅葱色＝薄い藍色

むらもなく＝一面に なめならず＝並々でなく

箔＝金・銀・銅などの金属を薄く延ばしたもの

花の紙＝藍色の紙

(一) 線①を現代仮名遣いに直して書け。

(二) 線②とあるが、何を引き退けたのか。文章中から一字で抜き出して書け。

(三) 線③について、筆者が「おもしろく」感じていることとして最も適切なものを、次のア～エから一つ選び、その記号を書け。

ア 雨とも雪ともわからないものがずっと降り続く中で、雲間から大きな星が一つだけ輝いている様子。

イ 曇っていた夜空が時間の経過とともにすっかり晴れて、強い光を放つ大きな星が一面に輝いている様子。

五

春香さんは、国語科の授業で批評文を書く学習をしている。次は、「題材のポスター」と、春香さんが書いた「批評文」である。これらを読み、各問いに答えよ。

【題材のポスター】



(日本図書館協会のウェブサイトから)

【批評文】

私は、このポスターのよさは、「図書館をもっと身近に暮らしのなか」というキャッチコピーに調和した絵にあると考える。

ポスターとは、見る人の視覚に訴えかけるものである。短くて印象的な言葉や絵、写真などを効果的に用いることが大切である。題材のポスターには、本を読む動物たちや人物がかわいらしく描かれ、絵がかもし出すあたたかい雰囲気、五音と七音を生かしたりリズム感のある親しみやすいキャッチコピーにぴったりと合っている。見る人は、キャッチコピーだけでなく絵も捉えることで、ポスターが呼びか

ウ 夜空一面を覆っている雲の切れ間から、数えきれないほど多くの星が華やかに輝いている様子。

エ 空を覆う雲がいつの間にかすっかり晴れて、大きな一つの星がひときわまぶしく輝いている様子。

四 次の行書で書いた①～④の漢字を楷書で書いたとき、画数が同じ漢字の組み合わせとして適切なものを、後のア～エから一つ選び、その記号を書け。

① 桜 ② 閑 ③ 祖 ④ 浴

ア ①と② イ ②と③ ウ ③と④ エ ①と④

ける「図書館を身近なものとして利用し、本に親しんでほしい」というメッセージを容易に受け取ることができる。

このように、題材のポスターは、キャッチコピーを魅力的に描き出した絵があることで、より効果的に図書館の利用や読書を促していると言える。

(一) 春香さんが「批評文」で取り上げた、ポスターを分析する際の観点として最も適切なものを、次のア～エから一つ選び、その記号を書け。

ア 改善すべきところ イ 全体の構成 ウ 絵の効果 エ 作成者の思い

(二) 「批評文」からわかる春香さんの述べ方の工夫として最も適切なものを、次のア～エから一つ選び、その記号を書け。

ア 初めと終わりに考えを置き、根拠を示して具体的に述べている。
イ 読み手に繰り返し問いかけ、関心をもたせるように述べている。
ウ 自分の考えに客観的なデータを加えながら、論理的に述べている。
エ 複数の具体例と比較し、題材の特徴を強調するように述べている。

(三) 「題材のポスター」は、図書館の利用や読書を呼びかけている。読書の意義についてのあなたの考えを、次の①、②の条件に従って書け。

条件① 二段落構成で書くこと。第一段落では、あなたが考える読書の意義を、第二段落では、そのように考える理由を書くこと。

条件② 原稿用紙の使い方に従って、百字以上百五十字以内で書くこと。